

師子焼遺跡発掘調査報告

2009年（平成21）年2月

三重県埋蔵文化財センター

序

三重県度会郡玉城町には、多くの埋蔵文化財包蔵地があります。これら多数の包蔵地があるということは、昔から人々が居住し、歴史と文化を築いてきた証拠です。

今回発掘調査しました師子焼遺跡は、玉城町内を東流する外城田川の左岸側の丘陵地端に位置しています。調査地近辺には、師子焼古墳群をはじめとして遺跡が多く存在しています。本遺跡の調査成果は、鎌倉時代から室町時代にかけての人々が生活してきた足跡の一端を解明しました。

私どもは、これらの貴重な文化財を祖先の残した歴史遺産として保護し、後世に伝えていくと共に、今後の文化の向上と発展の基礎として活用し、公開していかなければなりません。

今回の用水路整備事業に伴い、遺跡の一部が破壊されることになり、記録保存を図ることになりましたが、これを契機に本書が玉城町における郷土史研究並びに三重県の歴史研究の一助となるとともに、文化財保護の啓蒙にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、調査に当たりましてご協力を賜りました地元の皆様方をはじめ三重県農水商工部、伊勢農林水産商工環境事務所、玉城町教育委員会などの関係各位に厚く感謝申し上げます。

平成21年2月

三重県埋蔵文化財センター
所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、三重県度会郡玉城町上田辺に所在する師子焼（ししやき）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、次の体制により実施した。
調査主体 三重県教育委員会
調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究Ⅰ課 主 査 小濱学・西村美幸
技 師 萩原義彦・石井智大
臨時技術補助員 山本達也
- 3 本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課が行った。遺構の写真は石井・山本が撮影し、遺物の写真は、山本が撮影した。執筆・編集は、萩原・山本が行った。
- 4 図版中における位置と方位は、世界測地系の座標を基準とし、座標北を用いた。
- 5 本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。
SD：溝 SK：土坑 SE：井戸 Pit及びP：柱穴
- 6 当発掘調査による図面・写真等の記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 7 発掘調査は、三重県教育委員会が平成19年度県営かんがい排水事業（宮川2工区地区）に伴って実施した。
- 8 調査にあたっては、三重県農水産工部、伊勢農林水産商工環境事務所、玉城町教育委員会ならびに地元各位の協力を得た。

凡 例

【地図類】

1. 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図（世界測地系に準拠）及び玉城町都市計画図（日本測地系に準拠）である。

【遺構一覧表】

報告書に掲載した遺構の一覧表は、以下によって作成した。

- 1 一覧表中の遺構番号は、発掘調査における遺構の種類・内容を問わず通し番号である。本文中において掲載した実測図は、報告番号に基づいて作成している。遺構表示記号は、例言に記載している。なお、遺構番号は遺物出土の有無に係わらず付している。
- 2 時期については、各遺構の出土遺物等によって判断した。
- 3 規模については、長径（長さ）・短径（幅）・深さを各メートル単位で記載し、一部が調査区外に及ぶ遺構の平面規模や、未完掘遺構の深さについては「－」を記入した。
- 4 出土遺物については、遺構から出土しているものを記述した。
- 5 備考については、本文中において記述していない特徴等について記述した。

【遺物観察表】

報告書に掲載した遺物の観察表は、以下によって作成した。

- 1 報告番号は、各遺物実測図の番号に対応する。これは器種・材質如何を問わず通し番号である。ただし、これは掲載した実測個体のみであり、実測図を作成できない破片には、番号をふっていない。したがってこの番号が遺物の全てではない。
- 2 実測番号は、実測を行った際の番号である。前側の3桁は用紙の番号で、後側の2桁は用紙内での実測した順序の番号である。
- 3 出土遺構は遺構番号で示している。遺構番号は、遺構平面図及び遺構一覧表を参考にされたい。
- 4 器種については、判明しているものについて記載した。
- 5 計測値について記載した口径・底径・器高は、それぞれ最大値をとっている。また、「－」は、計測できないものを表している。単位は、cmである。さらに遺物によっては、長・幅・厚・高台径などを表すこともある。
- 6 調整・技法の特徴は、成されている調整について記述しており調整順序によるものではない。
- 7 胎土については、粗密を記し、括弧内に小石・砂粒の有無や大小について記述する。
- 8 焼成については、良・並・不良の3段階に分けて、その中間に位置する場合は「やや」を付記した。
- 9 色調については、『新版 標準土色帖』（小山・竹原編19版 1997年）に基づいて表記した。
- 10 残存については、その部位を12分割した際の残存度を示した。
- 11 備考は、その遺物における特徴的な事柄を記載している。

本文目次

I	前言	(萩原)	1
1	調査契機		1
2	調査方法		1
3	文化財保護法等による諸通知		1
II	位置と歴史的環境	(山本)	2
1	地理的環境		2
2	歴史的環境		2
III	遺構	(山本)	5
1	調査区の基本層序		5
2	遺構		5
IV	遺物	(山本)	8
V	自然科学分析	(株)吉田生物研究所	11
VI	結語	(山本)	12
1	遺構の変遷について		12
2	遺跡の性格について		12

挿図目次

第1図	事業地内調査区配置図	1
第2図	遺跡位置図	3
第3図	調査区位置図	3
第4図	調査区平面図・土層断面図	6
第5図	出土遺物実測図	8
第6図	師子姥遺跡周辺旧地形図	13

表目次

第1表	遺構一覧表	7
第2表	遺物観察表	10

写真図版目次

写真図版1	上：調査区全景（東から）、下：調査区西部完掘状況（西から）	15
写真図版2	上：調査区東部完掘状況（東から）、左下：調査区東部完掘状況（西から）、 右下：調査区西部完掘状況（東から）	16
写真図版3	上：S E 27完掘状況（南西から）、下：S E 30完掘状況（南西から）	17
写真図版4	上：S E 28断ち割り状況（北から）、下：S E 35断ち割り状況（北から）	18
写真図版5	出土遺物 (1)	19
写真図版6	出土遺物 (2)、調査区工事後状況（東から）	20

I 前 言

1 調査契機

今回の発掘調査は、県営かんがい排水事業宮川2工区地区に伴う水路敷設工事に伴うものであり、事業は調査対象地北方に位置している斎宮池からの水路工事である。そのため、調査区は水路の幅より細長いものとなった(第1図参照)。

2 調査方法

表土の掘削については、遺構検出面まで重機によって行い、遺構の掘削は、人力によって行ったが、一部の遺構は実測後に重機掘削による断ち割り調査を実施した。

遺構の実測については、全体の平面図は平板測量(1/100)にて実施した。調査区断面図(1/20)は、南側壁を実測した。それぞれの縮尺は、括弧内の数字で行った。

写真撮影については、調査区の東西方向及び主要遺構の個別写真を撮影した。カメラは、6×7cm判を基本とし、補助として35mm判も併用した。フィルムはカラーリバーサル及び白黒ネガを使用した。

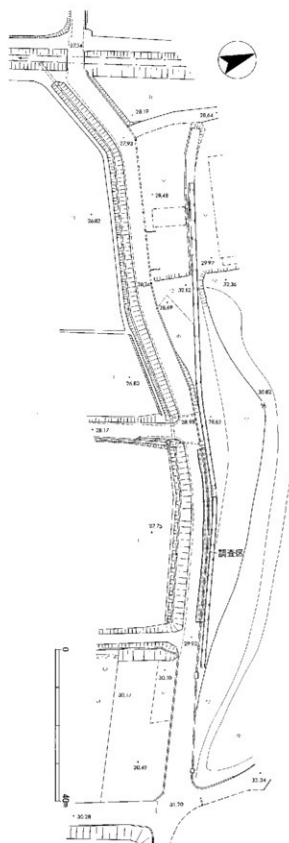
現地における発掘調査は、平成19年12月4・5・10日である。表土掘削は4日に、遺構掘削及び各実測は5日(平面:石井・山本、断面:小瀬)に実施した。また、測量については石井・山本が世界測地系座標に基づいて実施した。10日は重機により遺構を掘削して、井戸などの断ち割り調査を実施した後、調査区の引渡しを行った。

3 文化財保護法等による諸通知

調査後周辺の分布調査を行った結果、周知の遺跡の遺跡である篩子焼遺跡が今回の調査箇所以上にまで広がることを確認された。

文化財保護法(以下、法)等にかかる諸通知は、以下のとおり行った。

- ・法第97条第1項に基づく遺跡の発見通知
平成19年12月28日付教理第316号(県教育長宛)
- ・法第100条第2項に基づく出土品の発見認定
平成20年1月15日付け教委第12-4-16号(伊勢警察署長宛)
(萩原義彦)



第1図 事業地内調査区位置図 (1:1,000)

II 位置と歴史的環境

1 地理的環境

節子焼遺跡(1)は三重県中部の度会郡玉城町大字上田辺字節子焼に所在する。上田辺地区は、玉城町を東西に流れる外城田川の左岸に位置する。

玉城町域では、外城田川の両岸に「外城田川平野」と称される低位段丘が形成されている^①。外城田川平野は水田や畑地、住宅地として利用されており、多くの遺物包蔵地も確認されている。外城田川平野南側には標高200m～300mの「国東山地」が東西に横たわる。平野の北側には標高30m～50mの丘陵地である、「玉城丘陵」がある。この丘陵は小谷が複雑に入り組んだ地形で、幾つもある尾根には多数の古墳が築造されている。節子焼遺跡は玉城丘陵南側の丘陵端で、眼前に外城田川平野の水田地帯が広がる日当たりの良い緩斜面に立地する。

2 歴史的環境

旧石器時代 玉城町近辺で著名な旧石器遺跡としてはカリコ遺跡(2)、上地山遺跡(3)を挙げることができる。特にカリコ遺跡は、他の県内の旧石器遺跡と比較して、突出した量のナイフ型石器が採集されている。平成7年には玉城町教育委員会により発掘調査もなされているが、旧石器時代の遺構は検出されていない^②。上地山遺跡は昭和58・59年に発掘調査がなされている^③。県内の旧石器時代遺跡の発掘調査としては、大台町出張遺跡に続いて2例目のものであった。調査ではナイフ型石器をはじめとする多数の旧石器が出土したものの、遺物の集中地点や遺構は見られなかった。その他、ナイフ型石器や縦長剥片、弥生時代の石鑿が採集されている多気町の平林遺跡(4)に東接する平林東遺跡(5)でも平成16年に発掘調査が行われている^④。玉城町周辺地域では、発掘調査が行われた遺跡以外にも十数か所の旧石器遺跡が知られるが、多くは数点ないし十数点の遺物が採集されている小規模なものである^⑤。

縄文時代 縄文時代草創期の遺跡は、玉城町内では山神地区の神野遺跡(6)が代表的である。近隣地

域に目を向けると、平成7年度発掘調査で草創期の石器群や押型文土器が出土した多気町の高血遺跡^⑥が挙げられる。他の当該期の周辺遺跡としては、昭和38、39年の発掘調査で尖頭器・石斧、押型文土器が出土した多気町の牟山遺跡^⑦がある。

早期の遺跡としては勝田地区の榎ノ木遺跡(7)がある。平成元年の発掘調査で押型文土器などが出土している^⑧。榎田川流域では多気町の坂倉遺跡(8)があり、発掘調査で住居やが跡が検出され、発掘区は県指定史跡となっている^⑨。

前期は、全国的にも遺跡数が少ない時期で、玉城町周辺では当該期の遺跡は見られていない。

続く中期の遺跡としては、ナゴサ遺跡(9)、明豆遺跡(10)が知られる。

後期の遺跡は最も多く、庄田遺跡(11)や、中期から続く明豆遺跡がある。また、榎田川流域に目を向けると、新徳寺遺跡がある。平成6・8年の発掘調査で後期前半の遺構・遺物が多く出土した^⑩。

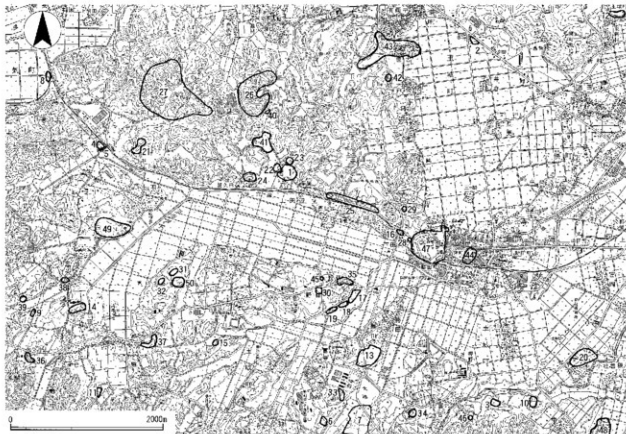
晩期の遺跡は、酒部屋西遺跡(12)、平成3年に発掘調査された上ノ山遺跡(13)の他、戦後早い段階で石鏃やササカイト剥片の散布が注目された多気町の森荘川浦遺跡(14)がある^⑪。

弥生時代 弥生前期の遺跡としては、仲垣内遺跡、山殿西遺跡(15)がある他に、前述の上ノ山遺跡の発掘調査で竪穴住居1棟が検出されている。

中期の遺跡としては、前述の上地山遺跡で4棟の竪穴住居が検出されているものが代表的である。上ノ山遺跡と、平成3年に発掘調査がされた波瀬B遺跡(16)ではそれぞれ方形周溝墓も検出された。

後期になると大規模な集落が形成されるようになる。主なものは仲垣内遺跡(17)、赤垣内遺跡(18)、月よべ遺跡(19)、小社遺跡(20)があり、多くの竪穴式住居や方形周溝墓が検出されている。特に小社遺跡は規模・内容共に際立った存在である。

古墳時代 玉城町近辺では、明確な前期古墳は確認されていないが、前述の小社遺跡では石銅片が採集されており、その存在が想定されている。中期古墳としては2基の大型方墳から成り、半円形スカシ



第2図 遺跡位置図 (1:50,000)

「国土地理院発行 『松阪』『明野』『国東山』『伊勢』(1:25,000)より」



第3図 調査区位置図 (1:4,000)

「玉城町役場発行 『玉城町概況図』(1:1,000)より」

の埴輪や石製小型丸底甕が出土した様現山古墳群(21)が知られる。後期に入ると当地周辺には多数の群集墳が築かれるようになる。調査地近傍では、本道跡に隣接する節子地A古墳群(22)・B古墳群(23)や、柿原神社周囲に41基の円・方墳が密集する朝久田古墳群(24)、遺跡東方の辻ノ長古墳群(25)、玉城丘陵内の富宮池古墳群(26)、上村池古墳群(27)が挙げられる。特に外城田川北岸では、辻ノ長15号墳で馬形埴輪等が出土し、波瀬A遺跡(28)やその北方の土山古墳群(29)でも円筒埴輪片が出土するなど、埴輪の使用が目立っている。一方の外城田川南岸丘陵地帯でも、稲生古墳群(30)、坊主山A古墳群(31)・B古墳群(32)、南シゴ古墳群(33)、矢塚古墳群(34)など、大規模な群集墳が確認されている。

古墳時代の集落で、調査がされているのは前述の小社遺跡、仲垣内遺跡、赤垣内遺跡の他、野籬里中遺跡(35)などの例がある。

奈良時代 奈良時代の遺跡で特徴的なものとして、外城田川上流域一帯に営まれた外城田窟跡群がある。窟跡群は古墳時代と飛鳥時代以降の窟跡計3基から成る。池ノ谷窟跡群(36)、発掘調査で7世紀末から8世紀前半の窟が確認されている原窟跡群(37)、いずれも飛鳥時代以降と考えられている長安寺窟跡群(38)、南山西窟跡群(39)が主なものである。さらに、県下でも珍しい平安時代に属する泉宮窟跡なども発掘調査されている。周辺には飛鳥・奈良時代のものと考えられる窟跡が他にも多数確認されている。しかし、窟を営んだ人々が住んだと考えられる集落は明確ではなく、今後の調査課題である。

平安時代 平安時代の遺跡としては、長谷町遺跡(40)が挙げられる。平成18年の発掘調査で9世紀後半～10世紀前半代の火葬墓や土坑が発見された。被葬者に富宮や荒木田氏関係者の可能性が考えられている。さらに、長谷町遺跡南方の谷地では平成19年に大谷遺跡(41)が調査され、平安～鎌倉時代の遺物が検出されている。

中世以降 中世の遺跡数は、それまでの遺跡に比べて格段に増加する。調査された主な遺跡は、仲垣内遺跡、上ノ山遺跡、橋ノ木遺跡、波瀬B遺跡、砂谷遺跡(42)、世古遺跡(43)㉓、蚊山遺跡、野籬里中遺跡、佐田南浦遺跡(44)㉓があり、前代までとの複合遺

跡であるものが多い。集落以外には、鳥取山中世墓(45)や平内山中世墓(46)などの中世墓もある。

また、当地は古くから神宮との関わりが強く、今も数多くの摂社・末社がある。そして、皇太神宮禰宜を世襲した荒木田氏の拠点でもあった。同氏は古代には田辺、城田、湯田の三郡に勢力を持ち、平安時代からは岩出周辺に大規模な館を構えた。しかし、北畠氏の台頭によりこの地で力を失った。北畠氏は、南北朝期に築城された田丸城(47)を拠点に南伊勢地域を支配した。岩出には、田丸城の支城としても機能した岩出城(48)が築城された。他の主な城館としては、平成2年に調査された山神城、国司一家一族の飯内氏が城主と考えられる笠木館(49)のほか、坊主山館(50)が知られている。(山本達也)

【註】

- ①『第一編第一章 自然』『三重県玉城町史』上巻 玉城町1995。以下、地形についての記述は同書を参考にした。
- ②玉城町教育委員会『三重県度会郡玉城町 カリノ遺跡発掘調査報告』2007
- ③玉城町教育委員会『三重県度会郡玉城町 上地山遺跡発掘調査報告』1985
- ④三重県埋蔵文化財センター『平林東遺跡発掘調査報告』多気郡多気町土羽所在 2008
- ⑤『第二編第一章 考古』『三重県玉城町史』上巻 玉城町 1995。以下、特に注記しない記述は同書による。
- ⑥三重県埋蔵文化財センター『高血遺跡発掘調査概報』1996
- ⑦多気町『第2編 原始』『多気町史 通史』1992
- ⑧三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第三分冊』1991
- ⑨註⑦に同じ。
- ⑩三重県埋蔵文化財センター『一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 新徳寺遺跡』1997
- ⑪註⑦に同じ。
- ⑫三重県埋蔵文化財センター『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第5号 2007
- ⑬『1 世古遺跡(西垣内遺跡)』『南勢の考古資料1 研究紀要17-2号』三重県埋蔵文化財センター 2008
- ⑭三重県埋蔵文化財センター『佐田南浦遺跡(第2次・第3次)発掘調査報告』2005

III 遺 構

1 調査区の基本層序

今回の調査区の基本層序は3層より成る。第1層は灰黄褐色(10YR4/2)の遺物包含層、第2層は黒褐色ないし暗オリーブ褐色(10YR3/1)の遺構埋土、第3層は褐灰色粘質(7.5YR4/1)の地山である。遺構検出は第3層の上面で行った。1層より上は、厚さ約0.5mの盛土又は攪乱層となっていた。

2 遺構

(1) 中世前期の遺構

①溝

SD1 調査区の西端近くで検出した。最大幅1.4m、最深部0.3mで、南北方向に調査区外へ延びている。埋土は暗褐色(10YR3/3)粘質土である。遺物は鎌倉時代の山茶碗片・土師器片が出土した。

②井戸

SE27 調査区の中央付近、北壁際において検出した遺構で、北半分は調査区外となる。東西径1.5m、深さ0.9mで、埋土は灰色土である。平安時代のロクロ土師器・鎌倉時代の土師器鍋が出土した。

SE28 調査区の中央付近、南壁際において検出した遺構で、南側約三分の一は調査区外となる。東西径2.2m、深さ1.4mで、今回検出した4箇所の井戸の中では最も規模が大きい。調査の最終段階で重機による斯ち割りを実施した。断面は楕円状で、側壁の傾斜は2段となっている。底部に曲げ物等は残っ

ていなかった。埋土は、上層が褐色粘質土、下層が黒褐色ないし暗灰色シルトである。遺物は、平安時代のロクロ土師器・土師器壺、鎌倉時代の山茶碗・山皿・土師器鍋・皿が出土した。

SE30 調査区の中央西寄り、北壁際において検出した遺構で、北側は調査区外となる。東西径2.0mで、壁際であったために底までは掘削できていない。埋土は、上層が赤褐色土、下層が灰色土であった。遺物は、鎌倉時代の山茶碗の他、上層から緑釉陶器が、下層から曲げ物の底板が出土した。

SE35 調査区の西部、南壁際において検出した遺構で、南半分は調査区外となる。東西径2.0m、深さ0.5mで、埋土は上層が暗オリーブ褐色粘質土、下層が黒褐色ないしオリーブ黒色粘質土である。遺物の出土がないため、詳細な時期は決し難いが、埋土の状況から他の井戸と同じ中世前期の遺構と考えられる。

(2) 中世後期の遺構

①溝

SD48 調査区の東端近くで検出した。最大幅2.3m、最深部0.4mで、南北方向に調査区外へと延びている。埋土は暗オリーブ褐色粘質土である。遺物は山茶碗・山皿片・土師器鍋片が出土した。これらは概ね鎌倉時代の遺物であるが、土師器鍋の中には16世紀代のものであるので、他の遺構群よりも新しい、中世後期の溝と考えられる。(山本達也)

遺構番号	種類	時期	規模(m)			遺物	備考
			長径 (長さ)	短径 (幅)	深さ		
SD1	溝	中世	—	1.4	0.3	土師器皿片、陶器椀片	
Pit2	ビット	—	0.4	0.4	0.3	—	
Pit3	ビット	—	0.4	0.4	0.3	—	
Pit4	ビット	古墳?	0.4	0.4	0.3	須恵器片	
Pit5	ビット	—	0.4	—	0.1	—	
Pit6	ビット	—	0.3	0.3	0.1	—	
Pit7	ビット	中世	0.3	0.3	0.2	土師器片	根石あり
Pit8	ビット	—	0.4	0.3	0.2	機土塊	
Pit9	ビット	—	0.3	0.3	0.3	—	
Pit10	ビット	—	0.3	0.3	0.1	—	根石あり
Pit11	ビット	—	0.5	0.5	0.3	—	
Pit12	ビット	—	0.4	0.4	0.2	—	
Pit13	ビット	—	0.5	0.5	0.2	—	
Pit14	ビット	中世	1.0	—	0.3	土師器片、灰軸陶器壺片、陶器碗	根石あり
Pit15	ビット	奈良?	0.6	0.4	0.2	須恵器残片	
Pit16	ビット	—	0.3	0.3	0.2	—	
Pit17	ビット	—	0.2	—	0.2	—	
Pit18	ビット	—	0.3	0.3	0.1	—	
Pit19	ビット	—	0.3	0.3	0.2	—	
Pit20	ビット	—	0.4	—	0.5	—	
Pit21	ビット	—	—	—	0.2	—	
Pit22	ビット	—	0.4	—	0.2	—	
Pit23	ビット	—	0.3	—	0.1	—	
Pit24	ビット	—	0.4	—	0.1	—	
Pit25	ビット	—	0.3	0.3	0.2	—	
Pit26	ビット	中世	0.3	0.3	0.2	土師器鍋・羽釜・皿片	
SE27	井戸	中世	1.5	—	0.9	土師器鍋片、ロクロ土師器片	
SE28	井戸	中世	2.2	—	1.4	土師器甕・鍋・皿片、ロクロ土師器片、陶器椀片、磁器片	
SK29	土坑	—	—	0.3	0.2	—	
SE30	井戸	中世	2.0	—	—	土師器片、陶器碗、陶器壺片、緑軸陶器片、曲物片	
Pit31	ビット	—	0.5	0.3	0.1	—	
Pit32	ビット	—	—	—	—	—	
Pit33	ビット	—	—	—	—	—	
Pit34	ビット	—	0.2	0.2	0.1	—	
SE35	井戸	中世?	2.0	—	0.5	—	
SK36	土坑	—	1.0	—	0.1	—	
Pit37	ビット	—	0.2	0.2	0.1	—	
Pit38	ビット	—	0.2	0.2	0.1	—	
Pit39	ビット	中世	0.2	0.2	0.2	土師器片	
Pit40	ビット	—	—	—	—	—	
Pit41	ビット	中世	—	—	—	土師器片	
Pit42	ビット	中世	0.4	0.3	0.1	土師器片	
Pit43	ビット	—	0.3	0.2	0.5	—	
Pit44	ビット	中世	0.2	—	—	土師器片	
Pit45	ビット	中世	0.3	—	—	土師器片	
Pit46	ビット	中世	0.3	—	0.5	土師器片、須恵器残片、陶器残片	
Pit47	ビット	中世	0.4	—	0.1	土師器片、陶器椀片	
SD48	溝	中世	—	2.3	0.4	土師器鍋片、須恵器片、陶器碗・皿・残片	
Pit49	ビット	中世	0.3	0.3	0.1	土師器片	
Pit50	ビット	中世	—	—	—	土師器片	
Pit51	ビット	中世	0.3	0.3	0.2	土師器片	
SK52	土坑	—	0.7	—	0.2	—	

第1表 遺構一覧表

IV 遺物

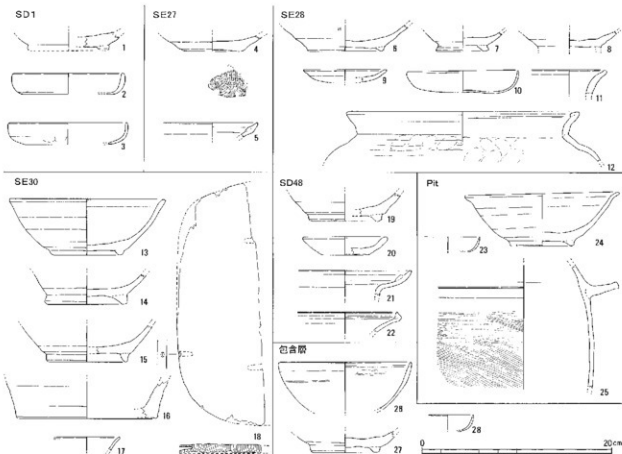
今回の発掘調査で出土した遺物の総量は、整理用コンテナに4箱分である。遺物の所属時期は、中世前期が最も多い。次いで平安時代及び中世後期の遺物が少量ある。以下、出土遺物の概要を述べる。

SD1出土遺物(1~3) 1は無軸陶器碗(以下山茶碗)の底部である。藤澤良祐氏による編年²⁾の渥美第6型式(13世紀前半)に属すると思われる。2・3は南伊勢系の土師器皿である。南伊勢の時期区分²⁾によるⅡb期(14世紀前~中葉)、B形態に属する。

SE27出土遺物(4~5) 4はロクロ土師器碗の底部である。底部には糸切痕を残す。斎宮編年³⁾では第Ⅲ期第1段階(10世紀後半)に相当する。5は土師器鍋の口縁部で、外面には煤付着が附着している。伊藤氏による編年の第3段階a型式(14世紀後半)に相当する⁴⁾。

SE28出土遺物(6~12) 6は山茶碗の底部で

ある。高台端部に初殻痕を残す。体部外面に線刻状の刻みの一部が見られる。藤澤編年の尾張第6型式(13世紀後半)に属する。7は無軸陶器小碗底部である。高台端部に砂が附着する。藤澤編年の渥美第4型式(12世紀後半)に属する。8はロクロ土師器台付皿の底部である。高台を欠損し、著しい摩滅のために調整も不明ながら、形態から斎宮編年の第Ⅲ期第1段階(10世紀後半)に相当すると思われる。9・10は南伊勢系の土師器皿で、9はA形態に属する。10はB形態のもので、南伊勢Ⅱb期頃(14世紀中葉)と思われる。この皿はSE28の検出時、まだ遺構の輪郭がはっきりしないレベルで出土しており、この遺構の埋土に含まれるものではなかろう。11は土師器甕の口縁部である。斎宮編年では第Ⅱ期第2段階(9世紀前半)に相当する。12は土師器鍋の口縁部である。伊藤編年の仮A段階(12世紀中~後葉)に相当する。



第5図 出土遺物実測図(1:4)

SE30出土遺物(13~18) 13~15は山茶碗である。13は焼成不良のため、全体に摩滅している。高台は低く、端部の摩滅が著しい。藤澤編年の渥美第6型式に属すると思われる。14は同じく渥美第5型式に、15は尾張型第5型式(13世紀初頭)に属すると思われる。16は陶器の壺底部である。17は緑釉陶器碗の口縁部である。胎土や色調などから9世紀代の猿投産と思われる。18は曲物の底板で、井戸の下層から出土した。側面には側板を接合するための目釘孔が1箇所と、底板を接ぎ合わせるための埋孔が2箇所認められる。

SD48出土遺物(19~22) 19は山茶碗の底部である。高台端に粉痕を有する。藤澤編年の尾張第5型式(13世紀初頭)に属すると思われる。20は無釉陶器小皿(以下山皿)である。高台はなく、体部はやや丸みがある。藤澤編年の渥美第6型式に属すると思われる。21・22は土師器鍋の口縁部で、いずれも外面には煤が付着している。21が伊藤編年³⁾の第3段階a型式(14世紀中~後葉)に、22が第4段階d型式(16世紀前葉)に相当する。

Pit出土遺物(23~25) 23は南伊勢系の土師器皿である。小片で、摩滅が著しく調整は不明である。B形態のもので、Ⅲa期からⅣa期頃(14世紀後葉)に属すると思われる。24は山茶碗で、Pit14内に供石と共に埋設されていた。全体の器形は丸みがあり、口縁端部がやや外反する。高台端には粉痕が残る。藤澤編年の渥美第5型式(13世紀初頭)に属すると思われる。25は土師器羽釜である。体部外面に煤が付着している。伊藤編年第3段階の南伊勢系土師器鍋に併行するものと考えられる。

包含層出土遺物(26~28) 26は瓦器碗の口縁部である。摩滅が著しいが、12世紀前葉のものであろう。調査で出土した瓦器はこの1点のみである。27は山茶碗の底部である。高台は台形で低く、端部に砂の附着痕がある。藤澤編年の渥美第6型式に属すると思われる。28は南伊勢系の土師器皿である。小片で、摩滅が著しく調整は不明である。B形態のもので、南伊勢の時期区分のⅢa期からⅣa期頃(14世紀後葉)に属すると思われる。(山本達也)

【註】

①藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」、『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年

②南伊勢系土師器皿の変遷については、次の文献を参考にした。三重県埋蔵文化財センター『多気遺跡群発掘調査報告』1993年

同『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1996年
三重県美杉村教育委員会『北畠氏館跡—多気北畠氏遺跡第26次調査—北畠氏館跡総括編—』2005年

③富宮歴史博物館『富宮跡発掘調査報告1 内院地区の調査 本文編』2001年

④伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」、『Me History』vol.1 三重歴史文化研究会1990年

⑤山茶碗を除く陶器等は、以下の文献を参考にした。
中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真跡社1995年

山田猛「伊賀の瓦器に関する若干の考察」、『中世土器の基礎研究Ⅱ』1986年

報告番号	実測番号	質	部材	透視・撮影等 1/16 器具	計測値 (cm)		調整・技法の特徴	土質	構成	色調	残存	備考		
					幅	高さ								
1	004-03	陶器	柄	SD1	-	8.6	-	外：ロクロナデ、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（微砂粒含）	良	外・内：灰白SV7/1	底部1/12		
2	004-04	土師器	皿	SD1	12.0	-	2.2	外：オサエナデ 内：ナデ	密（～2.0mmの砂粒含）	-	外・内：灰黄2.5Y7/3	口縁部2/12		
3	004-05	土師器	皿	SD1	12.7	-	2.3	外：オサエナデ・ナデ 内：ナデ	密（～1.5mmの砂粒含）	-	外・内：灰白10YR8/2	口縁部2/12		
4	005-03	ロクロ土師器	柄	SE27	-	6.0	-	外：ロクロナデ、糸切痕 内：風化により不明	密（微砂粒含）	-	外・内：緑SVRT/6	底部2/12	内面凹凸著しい	
5	005-04	土師器	皿	SE27	-	-	-	外・内：ヨコナデ	密（～1.5mmの砂粒含）	-	外・内：にぶい黄緑10YR7/3	口縁部3/12	外面磨け着	
6	002-01	陶器	柄	SE28	-	8.0	-	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～0.5mmの砂粒含）	良	外・内：灰白N7/0	底部5/12	外面に黒炭粉・内外表面磨け着	
7	002-02	陶器	小皿	SE28	-	5.5	-	外：ロクロナデ、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～0.5mmの砂粒少含）	良	外・内：灰白N7/0	底部12/12	内外表面磨け着	
8	002-03	ロクロ土師器	台付 皿	SE28	-	6.6	-	貼付高台	密	-	外・内：灰黄緑10YR8/4	底部3/12	風化著しく調整不明	
9	002-04	土師器	皿	SE28	8.7	-	-	外：オサエナデ・ヨコナデ 内：ナデ	密（～3.0mmの砂粒含）	-	外・内：にぶい黄緑10YR7/2	口縁部3/12		
10	002-05	土師器	皿	SE28	11.8	-	2.4	外：オサエ・ナデ 内：ナデ	密（～1.5mmの砂粒含）	-	外・内：灰白10YR8/2	口縁部11/12		
11	002-06	土師器	型	SE28	-	-	-	外：ナデ、ヨコナデ 内：ナデ、ヨコナデ	密（～1.0mmの砂粒含）	-	外・内：灰白10YR8/2	口縁部小片		
12	002-07	土師器	皿	SE28	24.6	-	-	外：工具によるナデ、ヨコナデ 内：オサエナデ、ヨコナデ	密（～2.0mmの砂粒と直粒含）	-	外：にぶい黄緑10YR7/2内：灰白SVR1/1	口縁部2/12		
13	003-01	陶器	柄	SE30	16.4	7.6	5.9	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～2.0mmの砂粒含）	やや不 良	外・内：灰白2.5Y7/1	口縁部11/12 底部12/12	全体に黒炭粉	
14	003-02	陶器	柄	SE30	-	8.7	-	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～2.0mmの砂粒含）	良	外・内：灰白SV7/1	底部3/12		
15	003-03	陶器	柄	SE30	-	8.6	-	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～0.5mmの砂粒含）	良	外：灰白N7/1 内：灰白SV7/1	底部5/12	内面自然釉	
16	005-05	陶器	壺	SE30	-	15.0	-	外：ロクロナデ・ナデ（底部） 内：ロクロナデ	密（～1.0mmの砂粒多含）	良	外・内：灰黄5/0	底部1/12		
17	003-04	瓦器 陶器	皿	SE30	-	-	-	外：黒粒 内：黒粒	密	良	緑・オリーブ黄7.5YR5/3 赤地：2R2/6.0	口縁部小片	口縁部厚材により調整	
18	001-01	木製品	面付	SE30	長 25.5	横 8.9	厚 0.9	-	-	-	-	-	-	側面に3打孔3個
19	004-06	陶器	柄	SD48	-	7.7	-	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～2.0mmの砂粒含）	良	外・内：灰白N7/0	底部3/12	内面自然釉	
20	004-07	陶器	小皿	SD48	9.0	4.8	1.9	外：ロクロナデ、糸切痕 内：ロクロナデ	密（～1.0mmの砂粒含）	良	外・内：灰白N8/0	口縁部1/12 底部3/12		
21	005-02	土師器	皿	SD48	-	-	-	外・内：ヨコナデ	密（～2.0mmの砂粒含）	-	外・内：灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	外面磨け着	
22	005-01	土師器	皿	SD48	-	-	-	外・内：ヨコナデ	密（～1.0mmの砂粒含）	-	外・内：灰黄2.5Y6/2	口縁部1/12	外面に厚く保ち着	
23	004-02	土師器	皿	P526	-	-	-	外・内：風化により不明	密（～1.5mmの砂粒含）	-	外・内：灰白10YR8/2	口縁部1/12	風化著しく調整不明	
24	003-05	陶器	柄	Px14	16.3	6.6	5.5	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～3.0mmの砂粒、5.0mmの直粒含）	良	外：灰白N7/0 内：灰白10YR7/1	口縁部10/12 底部12/12		
25	004-01	土師器	杯形	P526	-	-	-	外：ナゲテ、磨け付成ヨコナデ 内：厚層により不明	密（～4.0mmの砂粒多含）	-	外・内：灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	外面磨け着	
26	005-06	瓦器	柄	台合柄	14.0	-	-	外：風化により不明 内：洗滌、くさね	密（微砂粒含）	良	外・内：灰N4/0	口縁部2/12	風化著しい	
27	005-08	陶器	柄	台合柄	-	7.3	-	外：ロクロナデ、糸切痕、貼付高台様ナデ 内：ロクロナデ	密（～1.0mmの砂粒含）	良	外・内：灰白SV7/1	底部12/12		
28	005-07	土師器	皿	台合柄	-	-	-	外・内：風化により不明	密（微砂粒含）	-	外・内：灰白2.5Y8/2	口縁部1/12	風化著しく調整不明	

第2表 遺物観察表

V 自然科学分析

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は三重県度会郡玉城町上田辺に所在する師子焼遺跡から出土した容器1点である。遺物はSE30から出土し、SE30は、井戸とみられる。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹1種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) ヒノキ科アスナロ属 (*Thuopsis* sp.) (遺物No.1) (写真No.1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」 地球社(1982)

伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」 京都大学木質科学研究所(1999)
北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編I・II」 保育社(1979)

深澤和三「樹体の解剖」 海青社(1997)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

VI 結 語

1 遺構の変遷について

師子焼遺跡は、従来弥生時代の遺跡として認識されていた。今回の調査では弥生時代の遺構や遺物は検出されておらず、当該期の集落の中心は調査区外にあったと考えられる。

続く古墳時代の明確な遺構も見られず、若干の須恵器がピットから検出されているのみである。調査区に北接して師子焼A古墳群があることから、墓城の隣接地ということで調査区周辺には居住しなかった可能性もある。

奈良時代は、遺構・遺物共にはっきりした痕跡は見出されていない。平安時代もまた同様に、当該時期のものとは確定出来る遺構は見出されていない。しかし、遺物は平安後期以降多く見られるようになることから、当該期には調査区直近にまで集落城が及んでいたと考えられる。

鎌倉時代になると、調査区内でも遺構が認められるようになり、集落が調査地上に拡張してきたと考えられる。以下、当該期の遺構について見てみる。

まず、今回の調査で検出された特徴的な遺構は、4基の井戸である。いずれの井戸も、下層部では年代を特定し得るような遺物が確認されておらず、明確な廃絶年代は不明である。しかし、埋土の上層部分から確認された遺物は、鎌倉時代末から室町時代初頭までのものである。よって、これらの井戸は、多少の時期差はあっても、遅くとも室町時代にかかる頃には機能していなかったと考えられる。

次に、調査区内で最も多く検出されたピット群であるが、多くは直径0.3～0.4mの円形で、幾つかのピット内には、柱の根石と考えられる石材が残存していた。よって、形態の類似したピットの多くは掘立柱建物の柱穴の可能性が考えられる。しかし、調査区が狭小であったため、建物としてのまともは見い出せていない。時期としては、一部に古代や室町時代と思われる土器片が出土したものもあるが、概ね鎌倉時代前後に収まる。特に23の山茶碗は、ピット内で根石と考えられる石の下に挟み込まれるよう

な形で検出されている。

近くの遺跡での当該期の掘立柱建物の調査事例を見ると、本遺跡の南東約2.6kmに所在する上の山遺跡の発掘調査で、平安時代と鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。調査結果によれば、前者の柱掘方の平面プランは一辺約0.6mの隅丸方形であるのに対し、後者は約0.3mの円形で、一部には平らな石を根石に据えるものも見られるようになる³⁾。他に、東南東約1.8kmにある波瀬B遺跡の発掘調査では室町時代の掘立柱建物が9棟検出されている⁴⁾。ここで検出された柱掘方は、上の山遺跡検出の鎌倉時代の柱掘方と同様の状況が認められている。従って、調査区にかかっていると考えられるいくつかの掘立柱建物は中世、特に鎌倉時代頃のものと思われる。

以上のことから、今回調査した範囲における遺跡の中心時期は、鎌倉時代と考えられる。そして、これ以降で明確な年代が分かる遺構は中世後期のS D 48のみとなり、調査区周辺は居住区ではなくなると見られる。

2 遺跡の性格について

今回の調査では、玉城町内の遺跡として初めて緑釉陶器が検出された。これは、本遺跡が少なくとも平安期には上田辺周辺で中心的又は非一般的性格の集落であった可能性を示している。そこで、本遺跡周辺の平安時代の状況を見てみたい（第6図参照）。

まず特筆すべき遺跡として、今回調査地の北方850mの地点にある長谷町遺跡が挙げられる。平成18年の発掘調査で、9世紀後半～10世紀前半代の火葬墓などが検出された。火葬墓はその丁寧な埋葬法から、被葬者が富貴関係者や、遺跡南方の田辺郷周辺に活動拠点を持ち、皇大神宮禰宜を世襲した荒木田氏関係者である可能性が挙げられている⁵⁾。

この長谷町遺跡と本遺跡との中間地点付近では、平成19年に大谷遺跡が調査され、本遺跡と同じく、平安ないし鎌倉時代を中心とする時期の遺物が検出されている。しかしこちらは谷部地であり、師子焼

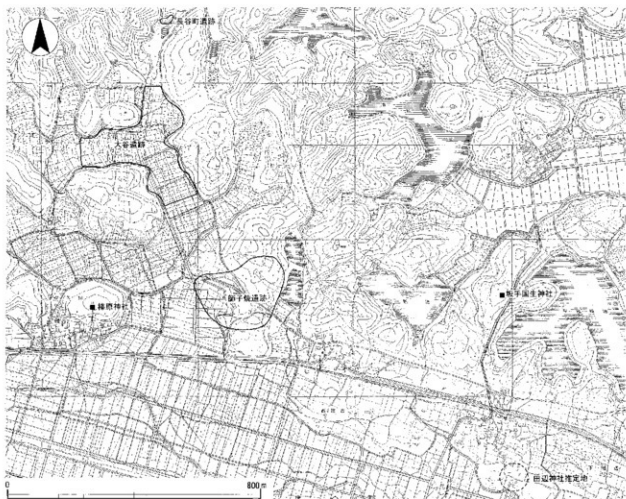
遺跡と比較して格段に立地条件は悪い。

また、周辺に神社が幾つか所在する。まず皇太神宮の摂社として、調査地の西方約100mに榊原神社が、東方約900mは坂手国生神社が鎮座している。坂手国生神社の南約600m付近の字辻ノ長には、現在はなくなっているが、荒木田二門氏が祖霊を祀るために建てた氏社、田辺神社があったと伝えられている^⑤。荒木田二門氏は田辺郡に拠点を持った氏族で、もと一氏であった荒木田氏が、奈良時代に一門と二門とに分かれた内の後者である^⑥。

このように、師子焼遺跡の近傍には重要な遺跡・神社が所在することが分かる。特に荒木田氏との関連が考えられている神社や遺跡があることは興味深い。また、師子焼遺跡の所在する上田辺地区は、荒木田二門氏が拠点とした田辺郡に含まれる。その田辺郡内で師子焼遺跡が中心的又は非一般的性格を持っていたとすれば、遺跡周辺に荒木田二門氏に関連した施設が存在した可能性も考えられよう。よって本遺跡は、田辺郡周辺に活動拠点を持った荒木田二門氏と関係の深い遺跡であろうと考えられる。(山本達也)

【註】

- ①三重県埋蔵文化財センター「一般県道度会玉城線道路改良事業に伴う 上の山遺跡発掘調査報告 一度会郡玉城町藤田一」 1992
- ②三重県埋蔵文化財センター「一般県道田丸停車場寄明線道路改良事業に伴う 波瀬B遺跡発掘調査報告 一度会郡玉城町下田辺一」 1992
- ③三重県埋蔵文化財センター「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより」第5号 2007
- ④註③に同じ。
- ⑤玉城町史編纂委員会「三重県玉城町史」上巻 玉城町 1995
- ⑥註⑤に同じ。



第6図 師子焼遺跡周辺旧地形図(1:12,000)

「玉城町作成の1:3,000地形図より」

写 真 图 版

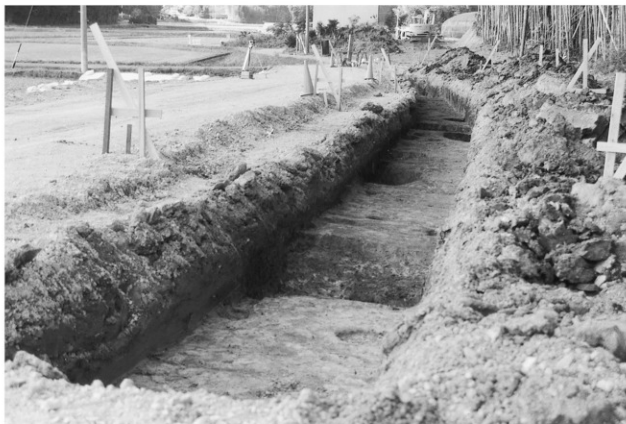


調査区全景（東から）



調査区西部完掘状況（西から）

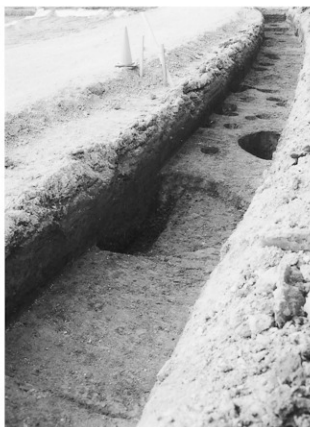
写真図版 2



調査区東部完掘状況（東から）



調査区東部完掘状況（西から）



調査区西部完掘状況（東から）



S E27完掘状況（南西から）



S E30完掘状況（南西から）

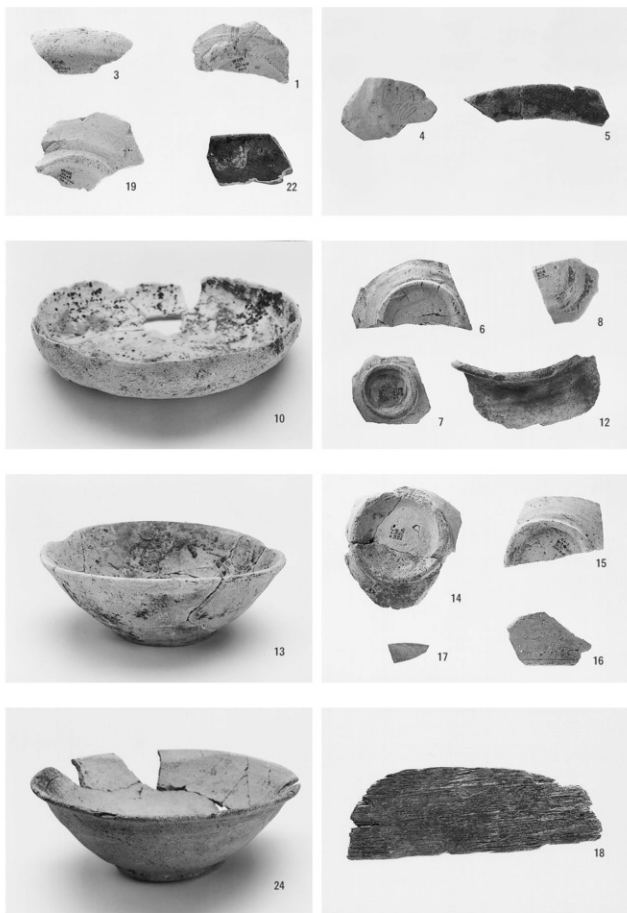
写真図版 4



S E 28断ち割り状況（北から）

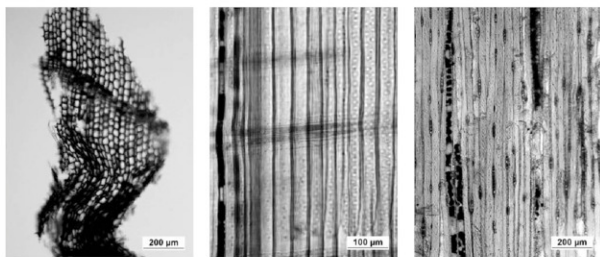


S E 35断ち割り状況（北から）



出土遺物 (1)

写真図版 6



木口
ヒノキ科アスナロ属

疋目

板目

18

出土遺物 (2)



調査区工事後状況 (東から)

報告書抄録

ふりがな	ししやきいせきはっくつちょうさほうこく							
書名	師子焼遺跡発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告							
シリーズ番号	306							
編著者名	山本達也・萩原義彦							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596 52-1732							
発行年月日	西暦2009年2月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ししやきいせき	みえけんわたらいぐんたまさきちょう	461	218	34度 29分 59秒	136度 36分 28秒	2007.12.4～ 2007.12.10	60㎡	平成19年度県管かんがい排水事業(宮川2工区地区)
師子焼遺跡	三重県度会郡玉城町							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
師子焼遺跡	集落跡	平安から室町時代	井戸・土坑・溝・ピット	土師器・須恵器・緑軸陶器・瓦器・陶器椀等(総重量4.25kg)				
概要	水路敷設工事に伴い、発掘調査を行った。調査の結果、黒褐色の遺物包含層下には暗褐色土層ないし黄色土が認められた。この層の上面で溝・土坑・井戸・ピットを検出した。遺物は、須恵器・土師器・緑軸陶器・灰軸陶器・無軸陶器椀(山茶椀)・木製品(曲物)が出土した。当該範囲は周知の師子焼遺跡の隣接地であるが、遺構・遺物が確認されたため、周辺の分布調査を行ったところ、遺跡の範囲が広がることがわかった。なお、周知の遺跡である師子焼古墳群とは一部重複している。							

三重県埋蔵文化財調査報告306

師子焼遺跡発掘調査報告

2009（平成21）年2月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社
